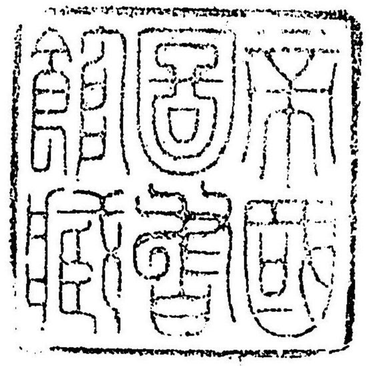
246
13
198

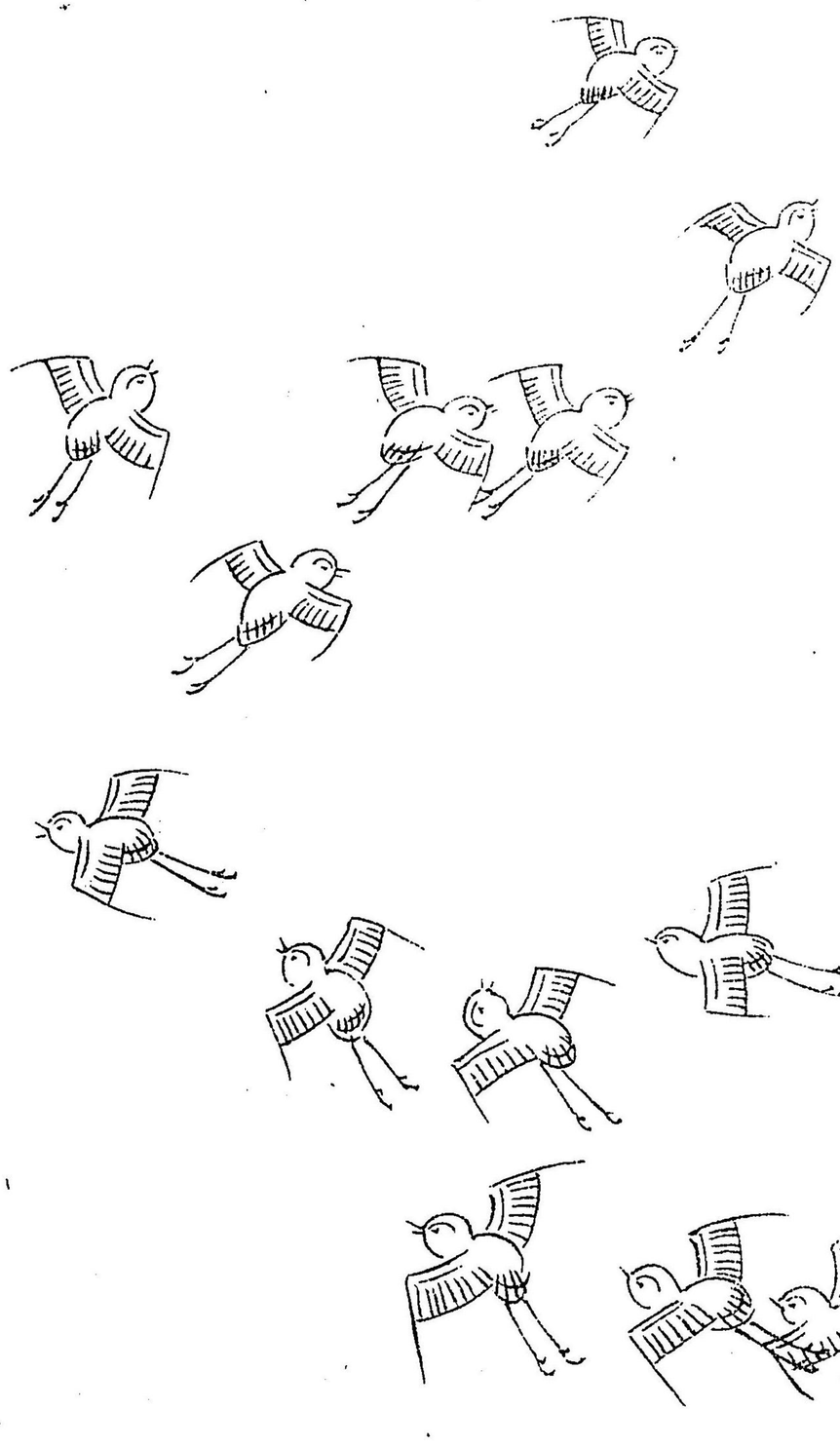
# 観世流改訂謡本

内二十一

弓八幡
鉢木
羽衣
通成寺
龍虎



明治
43. 5. 31
内交



文學博士　井上頼圀　本文監修
九岡　桂　本文訂正
観世清之　節附訂正

真之脇能

二月ツレ　高良明神前老翁
男　従者
中

弓八幡

[illegible]

[illegible]

[illegible]

里方の上
三人ウタ
「海つれ海波静なる時なれやうく洲
の雲も収まりて。げに元亨の道まぐら。
ゆきくれ旅もゆたうて。迷る日景も
トヲ
南なる。八幡の情よ。ツ
ワキ
「急ぎの程よ。八幡の心静
ジン
る神拝を申さうぞ。
ツレ
「神
真ノ声
こうた又
みる。月もきさくぶけさてやのぶ

ナ
き春のけきおなこの都は宜あれ
コヱ
「君が代は代
や雲も収まり。月もあ
よ八代はさざれ石。いわほとなりて
苔のむまで。松の緑色も常磐なれ
宝もいどうて。君が代は民鶴く閑
のさばもさくざりきもとどりも君
を守りて神国よわきて拝もあめる

位の品もあげつらひ、石清水絶えぬ流の
末までも、ぼけるとは、大悲の光をあらはす
なり。勝地なる猶と君の道
もぐらぬ。上古にたれ
枝も連なる地の嶺。曇らぬ所
代い久堅の。月は桂の男ぶりもき
やけき影まで。君萬歳と祈るな

弾ぶ海ぶ。ぼ。ぼ。ぼ

及びなければ未だ奏聞申さぬ。唯今
御来臨を待ち奉り申し、是へ捧げ奉る。
いかにありがたくもぞんじたる聞
ありぎて、喜ぶ奏せよとぞ。私は男の
寄りけるぞ。富士の御仕宣るぞ。
きていわれを申まべ、これは言葉
つもれば、えぬもれるぞ。けぶ来臨を待
ち申し。桑の弓を捧げ申す事。即ち
これを神慮あれ。真上向けぞ。
やがて神の代は桑の弓。逢て矢を
せを治めもぞ。時代のためあれよ
くく奏せよ。げくこれを奉
代の国いくさ。ずそれ弓
を取出だ神前。捧げて捧み申さぞや

●小謡

シテ引
やくもたつ出だて行のぶ開れあるぶ
きぞ（ワキ上）昔唐土周代を治め国のため
シテ引
よい引箭を色み手弋を納め御を塗り
（ワキ上）て引を倭文（シテ）剣を箱に納むること
（ツレ二人）そ泰平は代のあるなれそし周の
（ツレ二人）代これ水鉢名よも投薬国をうけぞ
（ツレ二人）上引（ツレ二人）薬の引どうも薬（ツレ二人）情ゆ（ツレ二人）拾れ海
（ツレ二人）もゆたうるそ君い（ツレ二人）陸の国ども
（ツレ二人）寒りあるなびく草木の恵も色もあう
（ツレ二人）たあるぶ神代ぞめでたき神代ぞめで
（ツレ二人）たあるけり。（ワキ）薬引高薬（ツレ）をそ世を
（ツレ二人）治めいきれ物唐土そもそも弓箭
（ツレ二人）を引そ世を治めもづめといつぞ。（ツレ二人）皇
（ツレ二人）の御代始まりても。ぞ唐土のぞ神力

●サシクセ獨吟

下五段サシ
あり。抜るる神功皇后。三韓を鞭め給ひ
い、ゝ、ゝ、ゝ

ばお神事は何も今はいと堅の天代居の
神社に詣で居て信仰や柳樹の青和
歌に詠れ居て
歌に和歌にそうぐ神霊と
上シテ
うつまや神代の跡まぐらも通あ
つまつぐとあまはやひもろぎ神とら
甲乙人
なまれ木の枝に金の鈴を結びつけて
やぶる神遊び七日七夜の御神楽真
上



よ天も納受し地祇も感應し海山深ま
る神代よりこの国を守り給ふなる。
上地
八幡三所の神託ぞめでたかりける
占意地
げにや拍手も高きぞ響きぞ
の神楽ぞ神慮ぞありがたきあり
がたきよ代の声聴かんと松尾の更け行く月
の使神楽を奏して居て行らん

願も瑞籬のぞへ代より住べてき
われ真心せこゝろ誠て　今世汝よな
るまでも　生けるを祈つ　高砂の
とわれなるぞ。代と守らんと作り
こゝまりたり。情ぞ蓬の中神も
ぞ結よ。おもてもあき清まやうよ。夫せよ
けり〳〵　里上方　待謡　中入　都より神勅をう〳〵。



とぐく寿もあぐべーぞぺぞあるも
音楽。陶えて　裏青畳ぞあり。げよ
あるたなる。寿時ぞ　出端本越　もとより
も人の国より従ぐ国。他の人よりも従ぐ人
と。拾ひ集まるうけき。真心廣相れ榎
弓。百萬代よ。もるまで。動ぐぞ絶え
ぞ産守る。敵代と従ぐ事なり

上地「きさらぎ」初午の神楽おもしろや
上句「信へや信へ」日数すまして神の白木
上句「御返しまぐも」なく代て参り信ずとか
吉言地「やウ」神舞「げにやまことしひるがうの神の
威光いやまさる」なる御願
「何はもぞ貴」けり「居と守り」
「古東」もとめあるとて考とよるの



甲「元人」「居の神徳天下一流と守るなり」上地「げに
げに神代今はけれの昔の物語
「これはいかに宮居せし」「神の昔
「上句「久堅の」「月は桂の男ぶりかな
「元」「歌い舞うと」「富類」「鳥類」「鳴く」「松の風
「元」「まても」「清神」「神と」「現れ」「なるもき
「神」「心」「現」「大菩薩」「情の神」「託ぞ」

九番習
四番目
畧二番

異端

鉢木

十二月ツレ同妻ワキ最明寺時頼前ハ旅僧ヨツレ従者シテ佐野常世

行くべ宮めの者通れぞ。こし方
もいづくなるまし。これは二所ノ御
沙門なるぞ。われ世に信濃の国より出
しが。餘りに雪深くあるは程に。まづこの
度は鎌倉へぞ。春よりは修行にぞ
でやと思ひ候。信濃の国の猟

ゞ三つ三
三つ煙く。高辻の袖寒く。吹くや
三ノ尺の大井川。拾つる身よりあまた野星。
元ノ元ノ元ノ

「そんなともかくもまてしゃ。わらはハ外面へも
で迎ひに出て申さぬぞやと思ひい」
「ゆつたる雪うるおいうるせもある人の面
白うゆうんそれ雪ハ鴉もよ似て飛んで
散乱しゃ鶴毛と着て立つて俳徊
もとゆうさんぜ今降る雪も。もと
はう雪よりねどもやれい鶴毛と

着て立つて徘徊まべ。紬も。打ちて紬
せぬぞ。細布衣陸奥のけ。の寒さを
しかよせん。面白ぎ。雪の日やお
面白ぎまや。沈大雪よ行とてこれ
よたぎみて出ぬりはぞ
行者の中入りはが。「夜のお宿と作せい
程よ。留守の由申してはぞ。」

まで待ちあらうぞの作せの程よ。
[シテ]まてしばしそれ[ワキ]はいかに
づくわたらうぞ[ワキ]あれは何人の
れらぶやそれ[イマ]まだ日は高くはへども餘
りに大雪にて前後[ボウ]を忘じて行程よ[イチ]
夜の宿を借りはへ[シテ][ヤス]まいらうずるそ
はへども。降りつる夏[グル]雪にて行程よお宿[カナ]遠



ひはまず[ワキ]いやいや見苦しきに苦しか
らぬずるそいひくるつる夜を借りはへ
[シテ]とめ申したくはへども。やれらまを拾さへ
使ふなたる[テイ]殿にて行程よおるく。お宿
思ひもよらぬずるそいやすり十八[ハチ]柳
あるなるぞ。あれ里[リ]にてよき泊[トマリ]のはひ。日は
暮れぬさまよ[ヒトアシ]一足も早くはいではへ

平
侍はいたうとおぼしたるまゝいとゞしう
シテ
痛がりくるなどゝいへども。お宿にまゐる
平
おなじうあるゝ曲もあやうきあき人を
ワキ上
侍ちゆうしてゐるこゝ、こゝ、ちかくまゐるやれ
ヨワク
ちかやうに哀れ、なるも前世の戒行拙き
こゝ、こゝ、こゝ、

今ゐる雪よ行き方を失ひ一所よたぎるみて袖ゐる雪ゆるも拂ひくし
行く氣色古歌の心よ似たらぬや駒
まあて袖うち拂ふ伏野
のわたりは雪のうゑ踏みしめやうゑ踏み
な大和路や三輪ゲ時なる伏野の渡
り　うれい東路の伏野のわたり

●小謠

はれ雪の暮よ未入つうれ浦せんより見
若くいへど一夜い泊り浦やげよ
うれも旅の宿。
はれ緑。樹の花はやぶるも洗せぬ契
ゐりそれい雨のま落うれ雪は軒ふ
りて憂き寝ゐぐうれ草枕夢より
霜や法ぐうれ
いるよりの宿

仲してゐるべきものなれ行くとも行くまじきせう
ぎるものもあるいはいるよりうち
これは家の飯の盛り方は若しもぎぢ
まるべらるべ　さて其の中は
べしいろ中ぬ　お宿とぞまるせてゐる
ぢも行くとも来るせぬぎるもお
くぬたちもこれは家れ飯のあるよう

中ぬ若しもぎぢ前一品さるべ
平　光　シテ
それとそ日一の事うそは賜ちゐる
のすきこめられぎると作せぬ急い
でまるせらるべ　心得中は　シテ　あで
て此家で中まもけぬ古へせよあり時
殺は伺ひ待は作りたるとそ家り
てゐるぬいて此家ぬとはつて身命とつぎ

いづくや廬生が栄花の夢い五十年。其枕邯鄲の假枕。一睡の間の夢のさめも。憂飯もいまだ覚ぬ。あわれやげにもうちも寝て。夢よも昔を思ふ。ゆめ思ひまもあるべきよのうち。ただ信じぬ。をもはどまで。信みうられたる古里。花咲春を待ちそめぬらねら



れねば。夢も見ぬ。行ゆくまで。行ゆくまであるべき。信じ更くるつて次第よ寒く。ありの。行ゆくまで。樵ってあてまらせうべきや。思ひ出たらまれば。鉢れまを持ちそれを切り火を焼ってあてべ。早げにく。鉢のまれはよ。さんば。某せよありし時。鉢のまままで。数多

ホトヽ集め持ちて居れば、ぬかりなく紙に
罷り成りぬ。いやく、ホトヽギスも無用なれど。
皆人を集めさせて居れば、ぬかりなく今も梅干
松を持ちて居れば、雪持ちたる木を見て居る。
某ら秘蔵して居れども今度のあとて
なりぬ。ひとつ持ちあて申さぬ
早
なるべし。いやく、これも思ひもよらぬ

今日その方志あり、ひとつも自然
又おこと出で来たる時の古歌を尚。
なりく思ひもよらぬ。やうもなし
自然堪忍せるあれん事。今迄
誠のホトヽ自分のためよ楽くならば
けんで真よ難行の法の一新と思ふ是也

●獨吟

鉢木

九

上
まうも洗濯をしてゆ・仕へ雪
上
ひけば新　ものとてあるあ　わびもあるや
上
拾べのなべ鉢の木切るてもらや
昔もつゝじと。雪うち掃ひて見れば面
白やいろせん。まづうえ木すり咲きそも
。宮の梅のホ面や。雪封じて寒きうも。
異ずすりまづさきだてば梅ときり

やそもべ。見ばとそ。いつ。人とそ憂けれ
ば里の折りもわけ。垣の梅とだよ。清な
と惜みつ。ゆきこ新よるまべ
しとものて思ひまや　櫻と見れ
ば春ごとよ。ぞ。ぞ。ぞ

ひさしくなりぬれば、はるばるまでぞ悲しき。さて松
さもびは、枝ためなりとまもりてあり
りあれと植置きそれ今は屋
作り。すいもとより常般すて新とする
梅桜切りくべて今ぞ時垣守。青苔の
樫くいあたりよくよりてあたり
給へや。早川の瀬よりき火あたり寒さを
忘れてはいとまぞよりもあらぬ火よ
あたりてはいとまぞ。早川の主ぞ名字
ぞ行とぞ家ぞたるは。いや某
名字はもなき者すては。行と作せ
いとも作ぞ今は見えぬぞ自然れ
時の為すてぞ行の若うぞ名字
と家ぞ行べ

きこえて佐野の源太義隆の家常世がか
れる果てはそれに行てかやうの
さんぐの狩(テイイ)よりなりて居(イ)たぞ　其
内そこに一族どもは押領(オオリヨオ)せられて
やはり分とかりそれに行と
て鎌倉へ出(ボ)りて居(イ)て是は法たる
ぬぞ　陣(ジン)の書くる所に最初者殺さ
れ候行よりもぞ　ていたらばやはりよおちぶれ
ていたぞ　源太義隆の武具一領長
刀(ナタヒト)えだ　あれ馬も一疋(イツピキ)つおいで持
ちてぞ　それ俗今までもあれ鎌倉居ず
ずあるぞ　ぞうたれたるも武具(グソク)形(ギル)て
投げけぞ　びたるも長刀(ナギナタ)と持(モ)ち　痩(ヤ)せ
たりともあれ馬よ学ぶ　一番よ馳(ハ)せ参(サン)じ

いえ[チャクトオ]ゑつま。備[カウ]前[ゼン]の国[クニ]の住人[ジウニン]。佐[サ]野[ノ]の太[オホ]郎[ラウ]

上[カミ]ノ

なんぢ。まづ。番[バン]を勤[ツトム]て入り申[マウ]す。

地[ヂ]方[カタ]あり。とても。くに。番[バン]を勤[ツトム]て。死[シ]なんは。分[ブン]

敵[テキ]とすれば。おもひ。ちあひて。死[シ]なんは。分[ブン]

は。まづ。ぢいたづら。飢[ウエ]つかれて。死[シ]

ん。命[メイ]。ばら。惜[オシ]からぬ。ぞ。ぞ。

身[ミ]の。ぬ。てはなて。ぢ。物[モノ]。ぬ。れ。者[モノ]の。

ぢ。ん。ほど。ぬ。て。ま。り。ぬ。ぬ。ぬ。

ぬ。ぬ。ぬ。

一元ヲ二人ニ上ル元禄三年ニ鎌倉ヨリ帝
よ常世ノ人ヲ見ル
ニイトニ
ちりあくぞ
ニイトニ
ねもの尋ねあれ
ニイトニ
帝有ざる法
ニイトニ
師ありひぐ
ニイトニ
くいかなれども
ニイトニ
拾露の
ニイトニ
縁よりなり中さんぞ
ニイトニ
法捨てさせ給よ
ニイトニ
元ナ
ニイトニ
元ナ
ニイトニ
ちと
ニイトニ
捨て出ぐ
ニイトニ
ぬれもの名義や
ニイトニ
元ナ
ニイトニ
中ト三
ニイトニ
侵シテ上ツヨク
ニイトニ
中入早笛
ニイトニ
むらん
ニイトニ
いろまれある旅ぐ
ニイトニ
食ノ
ニイトニ
ちと
ニイトニ
真ま
ニイトニ
行影
ニイトニ
く

ちさぞあるらん東八ケ國の大名
小名ぞ
ニイトニ
の
ニイトニ
様倉ぞ
ニイトニ
見事
ニイトニ
そろらん
ニイトニ
白金
ニイトニ
打ちらるもの
ニイトニ
見よ金銀
ニイトニ
のべたる
ニイトニ
刀
ニイトニ
銅
ニイトニ
銅
ニイトニ
らたる馬よ
ニイトニ
学ぶ
ニイトニ
葉
ニイトニ
婚中
ニイトニ
向きぐ
ニイトニ
びや
ニイトニ
ぞ
ニイトニ
乗れ
ニイトニ
ぐ
ニイトニ
ぞ
ニイトニ
ぞ
ニイトニ
常世ノ常
ニイトニ
よ
ニイトニ
家
ニイトニ
たる
ニイトニ
馬
ニイトニ
具
ニイトニ
や
ニイトニ
打
ニイトニ
の
ニイトニ
物
ニイトニ
具
ニイトニ
物
ニイトニ
よ

あらざる氣色ぞ見えらんさうあらざる。
所なれば誰よも考るまじと心ぞうの男
めざも。男めらねたる痩馬にあらず着遣お
そや上月に急げども。弱きよ弱き柳の
こ。シテ上 あ。よれなよれたる痩馬あれぞ。そ
どもあふれぞもさまへ進まぬ足弱車
の。学力あれぞ。あひうけたり 歩上 いるよ



誰らある 早ツレ 前よい 早 関ごの軍勢で
もいざ参りてあるう ツレ さんば参くま
りてい 早 其信軍勢は中よいうもち
ぎれたる景色と着さびたる長刀を
持ち痩せたる馬と自分ひうへたる武
者一騎あるべし。急いで迎方へまれと申
ひへ 早ツレ 畏つてい。いうよ誰らある 狂言 前よい

落ちけれども信濃は法師武者の中よりすぐれたる男にて肩さびたる長刀を持ち痩せたる馬に自分ひとりたる武者あるべし。急いで尋ねて前へ進まれとのたまふそれは畏つて候ずまて何ずまいぞ急いで御前へ参らんと何と某ほど前へ進まれとぞや有るべの事おろ思ひのうまぎや定めて人たるべきそうべしいやいや其方は事よてい。其信細い信濃武者の中よりも見苦しき武者と連れて来れるの所存ずまそうがぞ伊せぞ其方ほど見苦しき武者もいたぬ程よ信濃。急いで去り参らん何とたうへぞ法師武者中

ぬいうちも見者武者よ来れとゞめ
る〻仕事 さて某ゞるすそゝべ
し畏つたると申ゝ心得申ゝ
げ〻これも心得たり某ゞ敵人謀報
人と申しこげ前より出だされ頭
をそねられんためおのゝそれも力
ゝぞ〻前よまるんと大声さて

見渡せば、上方一度の早打ゝ。上
り集まる長きら星如く並み居た
り。佐竹前よ佐竹衆。元入二元入
つ。同じく指ゝ。影ひゝ中
よ横淀のちぎれたる。古陵者よ
清長刀。やうゝ横たへ。わるびれた
る氣色もなゝ。まりて前よ畏る

やあいうよあれなるい作野の源左衛
門の尉常世ぞこれとそいつぞやの大雪
の宿借りし僧行者よ見忘れてある
ぞ。作野のそ中せてよおぺうよ
てもあれ鎌倉よりただ事あるあらぞ。
ちぎれたりともはだ見苦く取つて投げ
懸けぞびたりともはだ長刀を持ち痩

せたりともあれ馬よ乗り一番よ馳せ
参ぜよ中しつる言葉は違ふ違
へぎてぞまりたりとそ弥勝あれぞまづ
くん度の城づくん食の儀よあ
らぎ常世が何の事。真偽知らんなあ
ろぞ。大蔵殿人ぐもぞ行ぞあらぞ中せ
べ。理非よりて其内ぞいなまべき

処あり。まづ〳〵海法のたゞめよ。常せ
ば本領作野の庄。三十余部迄歩
る処あり。又行ちも切（セツ）あり。いと雪降
て寒甚しよ。秘蔵（ヒゾウ）せし梅の木を切り。
火よ焚（タ）きあてし志とぞいつれ世よりい
忘るべきぞ。其時の鉢の木。梅桜松な
てありしよ。其云報る加賀る梅田越

中る櫻井上野る松井田（ソノイ）合せて三（ミ）の庄（シヨウ）。
る孫（シソン）よ（イタ）まるまで。相違（ソウイ）なきる同
業（ゴウ）の状（ジヤウ）堺（サカヒ）よ取（トル）そへ賜（タマ）びけれ。
常せ（ツネ）せしと賜（タマ）はりて。三度頂戴（チヤウダイ）
仕り。と見（ミ）へやん。ぐ〳〵。め笑（エム）
るもぐ〳〵。もこれ（コレ）はぐの（ヤ）ぢ氣色（キショク）さぞう
らるまし。さて國ぐに（クニ）備軍（ビグン）防（ボウ）。

[illegible]
[illegible]
[illegible]

殘りの天はる及びあるき方眺めるも。
心そゝもるる氣色とうるゝ忘れめやゝ
踏とわけて清見潟。遠うよ三保の松
原よ。立つつれいざや。南もたん〳〵
風むろふ。雲の浮はたつと見て〳〵。
紛せぞ人や海るらん。まてまぞ春
ゝぞ空くものどけき鈴の松常

上考

磯の聲ぞ。波の音ゆき鈴ゆぎよ。
鈴人浮ふ。海ゆ〳〵われこ保の松
原よ上り。海の氣色やゆぎむる所よ。虛
空よ花薄音樂聞え。靈香四方よ薫
ぎ。これ作ずと思ひぬ處よこれゆる松
ゆつゝき衣掛れりよりて見れば色
青ゆて常代衣よあらぎ。いうさま

取て御覽(ト)ぜよ。家の寶と
なさばやと存じ候 「女(シテ)」のう其衣(コロモ)は此方(コナタ)へ
まいらせ。行はめされいぞ 「男(ワキ)」これは拾(ヒロ)ひたる
衣なれば持て帰りぞよ 「シテ」それは
天人(テンニン)の羽衣(ハゴロモ)なれば。たやすく人間(ニンゲン)の夢(アト)とすべき
もの。なるまじ。もとの如く置き給へ
「ワキ」それは衣(コロモ)なくして天人(テンニン)とはなられまじ

まさしくもあるべき。まつせ(マツセ)の寺(テラ)の宝(ホウ)
物(モノ)。国(クニ)の宝(タカラ)とあるべきなり。衣(コロモ)を返
さぬ事あるまじ 「シテ」然(シカ)らば羽衣なくて
飛行(ヒギョウ)の道(ミチ)も絶(タ)えぬ。天人(テンニン)の御(ゴ)ん身(ミ)なれば
かなまじ。さりとて返(カヘ)してたび給へ
「男(ワキ)」いかに。いかに。いかに。いかに。
「シテ」いかに何と何くとも。いかに俤(オモカゲ)なれば
もとより御身(オンミ)なれば。天(アマ)の羽衣(ハゴロモ)なれば

かれ、おなじすがたして立ちのけざ、冷なき
あぐらを天人もたしねおき島の如くまして。
あぐらんとまれざ夜あり、地より後
めぐり界なり「そやあらんあくやあらん」
と悲めど、「何ぞ夜とうへさねざ」「力
及ぎぎ」「早せん方も」「月の露の玉鬘」
いざしの花も高殿、ほと人の五衰も



月の前と見えて流まいや「天代原」
ありさけ見れば。霞えつ。雲路惑ひて。
行くへ知らぬも「月の宮」
しら行く雲のうらやまきこえなう
●和清頁（ビン）の別れ「くしう」。聲今
更は僅なる。「雁の」「陶り行く。天路と向け
ば。「月の宮」「鶴の沖つ浪。「くう」「陶る

春風の空より吹くまで吹うつやく。
時雨
いろまつ。浅茅を見まれば。露ふる痛
きくの花。衣や返しやきぞる
てひ。あら晴や。浦方へ賜をうけ
時雨。野辺及びたる夫人の家業作法こ
こうて奉。浦方へ。衣や返しやきぞ
うれいなきて。天子の御らんをえたり。

浦びよりて。人間の法師
賢の業。曲を思ひ。業曲あり。
今ことうて奉つ。まうき人は得べ
しまうぐう。衣をあてがはまぐ。
そなまづ返して浦人。浦衣や返
なぐ。業曲をあまで其まうよ。天よりも
もう浦べき。人間よりあう。天よ

偽(イツワリ)なきものと　ワキカケル　あらじ　恥(ハヂ)やさぞ

そで　羽衣(ハゴロモ)を　着(キ)て　シテ　舞(マイ)　出(イデ)ぬれば　物着　女(ヲンナ)　衣(キヌ)を

着(キ)つ　霞(カスミ)　衣(ゴロモ)　羽(ハネ)の　曲(キヨク)　ワキ　天(アマ)の　羽衣(ハゴロモ)　シテ　舞(マイ)　出(イデ)ぬれば　雨(アメ)　降(フ)り　花(ハナ)　散(チル)　袖

ワキ　曲(キヨク)と　言(カト)で　シテ　詞(モノイヒ)　とりや　吉(ヨシ)　東遊(アヅマアソビ)

の　調(シラベ)　笛(フエ)　音(ネ)　シテ　時(トキ)　やそ　めぐる　ふん

ノリ地　花(ハナ)　入(イル)

おかけ　そ　ふ　陸(クガ)　天(アメ)と　ちつ　ぞ　二(ニ)　弾(ダン)　出(イデ)



●サシクセ獨吟

の　古(イニシ)へ　十(ジフ)方　言(ヒ)　専(モハラ)　ちと　定(サダ)め　より　空(ソラ)　入(イル)　渡(ワタ)り

も　ある　ばし　ぞ　仁(ヒト)　久(ヒサ)　陸(クガ)の　空(ソラ)　ぞ　名(ナ)　ぞ

けり　シテ　ツレ　ツレ　ツレ

甲　けて。後ろ姿。まよひたる。曲とりやう。春霞たなびきよけり。
中　久堅の月は桂の花や咲く。げにまことに
中　ひづゝ色めく春の来るもや。面白
中　やまゝ。でゝ。ぞ。ぬ。ぬ。まつ。庭の
中　面影。まゝ。ぞ。ぬ。ぬ。まつ。ぞ。
中　面まゝ。春の色や三保

上　清見潟。富士の雪。ひづゝ。春
中　晴。ぬ。ぬ。波も松も長閑なる海
中　の有様。其ゝ。地。行。高てんむ
中　ぬ。の。ぬ。ぬ。ぬ

[illegible]

[illegible]

つて。緑の波は。海島が。拂ふ。花

[illegible]

ありて。げに。雪と見て。まがふ。白雪の袖ぞ。ぬれ

[illegible]

る。南無。[illegible]

[illegible]

東遊の。舞の曲。序舞 あるじ。[illegible]

[illegible]

宮の。緑の衣

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

●仕舞 端ノ舞 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[

れいの。花の。盛りに。行きて。見る。程に。時移りて。夜の。明け方に。成りぬれば。三
の。羽衣。消え。失せ。たる。ものびきたなびく。三
保の松原。霞の。高き。富
士の。高嶺。かすみ。そうよ。あり。て。天の。宮
の。霞。ゆ。まぎれて。失せ。ぬ。

重習

道成寺

三月

白拍子・霊・白拍子・蛇体
道成寺住僧
従僧
狂言　能力二人

平仮

紀州道成寺の住僧。ぞ。ぞ。
て。寺。に。て。
と。撞鐘。を。
再興。鐘。を。鑄。
て。程。鐘。の。供養。
いる。能。力。を。鐘。

道成寺

あるら（アカシ）「さんぬしも鐘楼へよりては法師
ゆく（ワキ）「今は鐘の供養をいたさうまうす
てあるぞ。なるほど細ある間。女人禁制をす
あるぞ。なまじひて一人もゐれば。其方心えゐへ
（狂言）「畏つて候。（シテ）「作り罪も清えぬべし。
（ツレ）「鐘の供養をまうす　これは此國
の傍に住む白拍子にてさそうも道成寺

と申す寺に。鐘の供養が候ほどに。
申す程に。今まうでやと思ひうの間
（上ゲ）「程なく。鐘の。（ウ）「煙満ちまうぶ松原。
急ぐ心うまた暮れぬ日高の寺に着き
（ト）「ましけりく　（ワキ）「急ぎまうる程に。日高の寺に
着きて。やがて供養を持まうまうして
（シテ）「これは此國の傍に住む白拍子に

て。鐘の供養とて。華やかにまひ給へ。
供養と拵まをして。たまはり給へ
あらうれしや。淀の華やかにまひ給へ。
れしやさて。華もそんとて。おれなまま
ま。宮人の。烏帽子を。召して。假な
ら。そもそも。何とまをめけり。花の
に。ここに。外なる。松も。もう。
聞くそめて。鐘や



響くらん。渚の。風の。音。
渚の。風の。音。
渚。橋。渚。成興。業の。寺。
渚。成。寺。と。名。つけたり。
寺。
のや。春の。夕。暮。まで。見れども。
上。
上。桐の。鐘。と。名。
散りける。
散りける。
日。
日。暮。鳥。鳴。霜。雪。夫。滿。漢。程。

ぬく日高の寺の。元村の漁火。怒よ對
して人。眠れそよき。清そと。立ち
帰よ。稚すねひすりて。接めんと
せ。ら。へ。清鐘怨めしやそ。龍
頭よ手。を掛け。元ヤ。早ヨ。花よそ見そ。引
きうつきそそ。先せるけ。元ヤ。早ヨ。言葉
道新。やらは儀。なしそそ。問く

女人禁制の由申してゆ。由事ある
るそ。のう。清。清。ゆ。清。ゆ。清。ゆ

切れ者一人の息女を持つ。其頃奥よ
り熊野へ年詣をする代のあり。
庄司もとより宿坊と定めつゝも彼
の所へ参りぬ。庄司娘を寵愛のあ
まりよりて客僧とそ泊つまよりて
よろんで戯れ。幼心に真と思ひ
年月を送る。ある時は客僧庄





司に許よ参りしよりの女房をけ人
静まりて後。客僧の間に行きつま
てわるさをなして置き行く。急
きむへ給へと申しおき客僧大きに
驚き。さあらぬ由にて夜よま
きれ忍び出て清寺に参りぬ。頼
むの申しおき隠まくまく可なれ

を撞鐘とおもひ長門は法華僧と憶し置くさてかの女房は道成寺へ迯きまとそ迯つくるを高門の水汚てその外は塗りかの門のとをやおなたこなたへ走りまとそ入かの毒龍となつて門と見ると思ふ程越法寺へまとり。

とかくこと尋ねしに鐘のありたるとあやしめ龍頭をくそへ七まとひ纏ひ煙と出たる尾をはつてたらけを鐘に即ち湯となつて鉄よりおそろしかりけるぞ

んはらはらとまとひそ言葉通斬うらはらまとひ物語そひそね其時の女の執心殘つて又此鐘を障碍となるまとなし我人の行功もお

やうに為のそこそこいへ。渡る所にて汝
達と二度鐘楼へ上げらまるそこい
[平上]
[ロ]
[ロ]
[ロ

そなりたらくりけや手をよりする
れ陀羅尼不動の慈悲の偈をとなへ
焔の黒烟をたてて行りける。行り行
られ捨ねとて此鐘撞き出せらるね
と此鐘撞るとて見えて鐘の鐘楼
よりきえたり。あれ見よ蛇婦顕れたり

上ヨリ
上
清涼寺方角清浄清清西方白

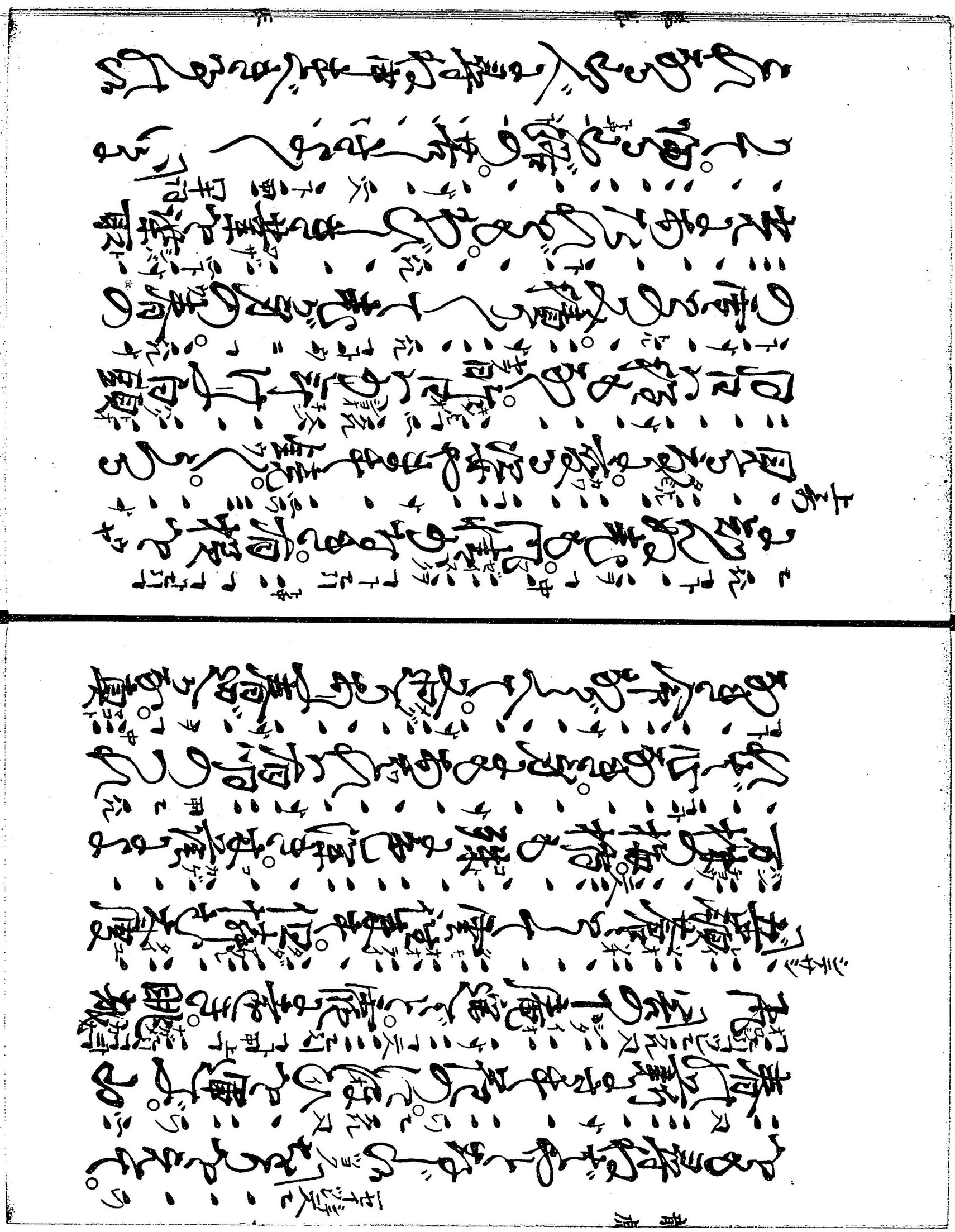
體白龍清中出黄婦黄龍一丈
三尺千世界に恒河の龍王哀愍
細雨。長愛白清のへきんなれたい
つよ大蛇のあるへきそと。行り行られ
うそと執よう起きあらて怒ち
鐘に向て。猛火となりて
見身を焼く。白高の門波深閑よ

為んとて、[ト]、[ト]、[ト]

同九州博多の津より処よりの便船の
の間に沈清丸に乗り込りは
天の原八十潟うけて漕ぎ出づるく。船
跡の末も不知の波路やあとよりの八
て行くへよりつく雲の波震をかくる海原
なりて船出せるもの。やや暫時
よりく。あり時やはり。船出と思へる。



仏神の古い護はもやありけん。行進安穏
に帆柱もなく波底行くて心静ら
に所くと眺せぎやと寄ぶるや虹霓
浦と湧て人煙高く。巨水天に連なる
て眺望遠うあり。眺めやる高くもと
の群竹の霞とめたる面白さよとされる
迎ひ人とのの事りの。沈者と待ち居る



不思議やな見聞れば神妙なり。
うさきまこれなん[ニツトオ]居の山門にて出るなり
げにもよくぶんでいるもの。われ日れ
本より法華法流布の事跡を尋
ねんとて渡天の志あるまゝ。遠く思ひ
立ちて。すでに渡天の所なれや。昔い
問きつゝもきせよ。ありがたうけるかな



つゝかれ。げに痛ましや。遠くと行くも書
き旅衣。立ちは日の本。
佛法東漸やうつり。
の源書き。昔仏と今さらに
くもうの。
胸の月。鐘の所。
く雲の。
月。

二イスト一ゲ一ナ一ス一ル一ス一ル一ナ一ス一ル一ス一ル一ス一ル

「高類」なれども、其勢ひを尚
「手上」
らせて「行」くべきの人
「爭ひの」
上意
「牛」の角にて、
「牛」の角にて、
ひ人の身も、
「牛」の「猛」の「高類」の戰ひ
事もとわりやく
の有様くに
「牛」
「龍虎」の戰
「それ」



と受くるも、其の威勢を爭ふ
事、人間にて、
「なれ」
「同」じ、
「龍虎」
「猛」
「虎」
「龍」
「雲」
「起」
「甲」
「爭」
「高類」
「龍虎」の
「雲」
「龍虎」
「弱」

の中顔と龍顔と申し古家物と龍
駕とも又名づけたり　さて又虎が
りそめよ。色もなる里の道しめて。
みむと宮むとも。もとより所を直すして。
門の清きをわが友と。頼むる尋ね歌
清く。曇らぬ法の道を知る。維摩よ仕
へ奉る。入口場の一つまもあらられける

と聞くもんと。龍吟ぶれど雲起り。
虎嘯けばぞ山まぢと聞きもまして
なり見ることそらぶぎ。ありけれ。
仁國の扣法。くもも見ぬ。汎み
陰の沼ぢ。竹の林の七方なる。巖の陰
よりて。月と湛見へと。夕日も
傾きぬ。眼中さんと流れ。新を肩

ようもめて。居れば道遠くと。家路
をさして。うちけり。中人 さても男
男儀やうべの。叔のまうよ。路々かけ。
竹林を過ぐる。煙黄昏霧
うて夜の色。侵さ。風枝蕭蕭
て。夜の嵐より冷まじや。上臈 あれく嶺
より雲起り。俄に降りくる雨の音。

鳥獣猛獣。妻子地より離れ。光のうちよ。
現れいづる。人魚龍の物。遠くよりそ
用も所と消。
右ヨリ上ニ
りなり 立 もく。黒雲竹林より覆ひ。
ミ
く。覆ひ。
洞より龍。
うちより雷。

●仕舞

前虎

一、ぞっと逃げては、坊主、驚き。
一、なぜ逃げては、坊主、驚き。
一、名は、何ぞ。氣色、なほ、ものすごし。
一、ものすごし。
一、可愛ゆ。金龍雲、おりくだつて。
一、悪虎と、ちらんとをんでもつり。悪龍音
一、の戰、濃もち。もとより、虎乳の坊
一、猛く。尼も、石も、劍の如くなる、竹枝を
一、振つて。金龍、なほ、悪虎を、巻うん
一、と。覆ひ、ひらめ、ひらめ、振つて、逃つめ、
一、きんとまれば。金龍雲、在よ、遠ものよ
一、ぶれば。悪虎、いらぬ、ほひ、嚴よ、ぶり。
一、遠うよ、見送りて、金の坊、ひたりを
一、振ひ。又、竹枝、なる、乱びまくり。又、竹枝、
一、乱び、帰つて。其まま、岩洞、入るよ、ぶり。

246
13
198

明治四十三年五月二十日印刷
明治四十三年五月廿五日發行

著作權所有
許複製

訂正兼發行者　東京市麹町區中六番町二十九番地　丸岡桂

訂正者ノ檢印ナキモノハ僞版也

印刷者　東京市下谷區二長町壹番地　塚原錦三郎

印刷所　東京市下谷區二長町壹番地　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麹町區中六番町廿九番地　觀古流改訂本刊行會
電話番町二五四四番